

## 言語理論と英語教育(2)\*

—伝達機能の重要性—

田 中 彰 一

### Linguistic Theory and English Teaching (2)

—The Importance of Communicative Function—

Shoichi TANAKA

This paper is concerned with how functionalism in linguistics makes a contribution to English teaching. Functionalism is usually taken to mean approaches in which sentence structure is related to discourse-pragmatic distinctions such as new and old information, or focus and presupposition. I deal with verbs like *come* and *go*, the adverbial *please*, reciprocal verbs, and passive sentences, showing that they are related to certain communicative functions. I argue that learners who are able to understand such communicative functions of sentences would use English appropriately in communicative interaction.

#### 1. はじめに

##### 1. 1. 機能主義の立場

言語を形態・構造から研究する形式主義の立場に対して、言語を伝達機能からみる機能主義の立場がある。両者は相反するという関係ではなく、言語現象を説明する上で補い合うものと考えられる。言語の形式に対して考えられる機能とは、形式が表す内容をどう伝えるかということである。したがって、機能主義の立場では、文を越えた談話のレベルで、その形式がどんなはたらきをしているかという視点から言語現象をみるということになる。このような、ことばのはたらきを新しい視点

でとらえる立場は、一般に機能主義や機能文法とよばれている。<sup>1</sup>伝達機能に着目してことばを考えるということは、言語研究にだけ必要なのではなく、言語教育においても必要になってくる重要事項のひとつである。<sup>2</sup>ことばの伝達機能は、ある程度直観的に考えて処理できる部分もあるものの、コミュニケーションにかかわる側面を正確に理解するのに必須のものであるということが出来る。

ことばのもつ重要なはたらきに情報の伝達があることは異論をさしはさむ余地はない。人間は音声であれ文字であれ文を連ねて意味ある内容を相手に伝達している。対話を含め、

この文を連ねたものが談話<sup>3</sup>である。つまり、談話は話し手（書き手）が聞き手（読者）に情報を伝える場である。しかし、話し手は発話において、聞き手に一方的に情報を受け渡すのではない。話し手は、普通、聞き手が自分の受け渡す情報をどう受け取るかという側面から情報の配置に気配りをする。その気配りには、談話の原則が大きくかかわっている。

まず、話し手は聞き手に何か新しいことを伝えなければならないということがある。聞き手にすべてわかっていることを伝えても意味がないからである。しかし、話し手はすべて新しいことだけを伝達するわけでもない。聞き手の方から見れば、すべて新しい情報だけを聞かされても苦痛だけで意味がない伝達になってしまうであろう。そこで、話し手は、聞き手がすでに知っていることに新しいことを付け加えていくという気配りをしなければならないわけである。聞き手がすでに知っていることと話し手が思っている情報を旧情報、聞き手にとって新しいことと話し手が思っていることを新情報という。情報を伝達する場合、旧情報を先に言ってそれに新情報を付け加えるというのが、話し手の気配りのひとつである。これは「旧情報から新情報へ」という談話の原則になる。

たとえば、簡単な場合として、語順を考えてみる。一般に、文文法では場所・時を表す副詞表現の位置は原則として文末とされているが、談話では文頭に来ることが多い。次の例はある物語<sup>4</sup>の冒頭部分であるが二番目の文は場所を表す副詞表現が文頭に來ている。その理由は、読者に対する作者の気配りがあるからである。

- (1) When you walk across the Common from the Beacon Street side, coming up from Charles Street and angling toward Park Street, you are walking up one of those low urban hills that no one notices, unless they are running. At the top, with the State House at about ten o'clock and the Park Street Church straight ahead at twelve o'clock high, you look down toward the Park Street Station.

名詞句 the top は定冠詞が付いていることからわかるように、第一文中の one of those low urban hills を受けて使われている。そのため、第二文に読み進んだとき、前の文で直接述べられていなくても、the top は聞き手（読者）にとって旧情報になっていると作者は判断し、それを文頭に配して情景描写をつないでいるわけである。上で述べたように、談話の流れは旧情報から新情報へと移るのが原則であるため、むしろその語順でないと、情報の流れが切れてしまう。そうしないための気配りによって、情景描写のための文はあたかもカメラが見えるものをゆっくりと映し出すように自然につながっていく。このような自然な情報の流れで冒頭を書き出すことによって、作者はボストン市のコモン公園を中心とした情景を自然に物語の中へ導入することに成功している。このように、ある要素が文の中で占める位置は、談話の原則にしたがって話し手（書き手）によって決められる。

旧情報から新情報へというのは談話の原則のひとつであるが、談話上の機能には「焦点は文末に」や「長い語句は文末に」などの原

則<sup>5</sup>のほか、主題(theme)と題述(rheme)、テーマといったものがある。また共感(エンパシー)、前提、話し手の意図、語用論的側面など多くの機能的要因がある。こうした機能的要因は相互に関連した形で情報の伝達に結び付いている。

## 1. 2. 構造と機能

文構造と談話機能の関係を考えると一般に次のことが成立すると考えてよいと思われる。

- (2) 論理的意味内容が同じ2つ以上の文構造があるとき、それらは異なる伝達機能上の意味をもつ。

「論理的意味が同じ」というのは、(1)で見たような移動が起こる文と移動前の文の関係や、能動態の文とそれに対応する受動態の文の関係になる。<sup>6</sup>受動文の場合として、たとえば、(3)のペアを考えてみると、

- (3) a. I hit the boxer.

- b. ?The boxer was hit by me.<sup>7</sup>

文(a)と(b)は能動態とその受動態という関係であるから、論理的意味は同じと考えてよい。しかし能動態の(3a)は問題がないのに対して、受動態の(3b)はおかしいとされる。受動文は中学2年(一部3年)で導入される項目であるが、一般に、[主語+他動詞+目的語]の構造から目的語を主語として立て、[新主語(能動文の目的語)+be動詞+他動詞の過去分詞形+by+旧主語(能動文の主語)]へ転換すると指導される。しかし、いつも態の変換が可能であるわけではない。(3)は受動態への転換をするとおかしくなる例である。「直観的におかしいから」というのは説明にはならない。ここで、転換ができないのは、構造上の問題ではなく、伝達機能上の理由である。つ

まり、一人称のI, meで表されるのは話し手自身であるのに、受動態の(3b)では話し手の視点が自分自身から離れて第三者であるthe boxerに向けられているからである。あとで詳しく見るように、受動態はその主語が指している人物に視点を移して共感を示す表現なのである。<sup>8</sup>話し手自身の視点と新主語寄りの視点が矛盾しているという理由で(3b)の文はおかしくなっている。

本稿ではこのような視点の問題を中心に英語の伝達機能を見ていくことにしたい。一見問題がない構文でも談話では重要な意味をもつ場合がある。問題になりうる場合として、comeやgoなど移動にかかわる動詞、pleaseなどの視点にかかわる表現、相互動詞、受動文における伝達機能を考える。すでに述べたように、伝達機能に着目してことばを考えるということは、英語を指導する上でも必要になってくる重要事項のひとつである。伝達機能は英語の表現すべてにかかわってくるはたらきであるのに、これまでの英語の指導では無視される傾向があった。教材の作成や教材研究、またリーディングや文法の指導ばかりでなく、リスニングやライティングの指導、さらには自然な情報伝達<sup>9</sup>という観点から特にコミュニケーションの指導に貢献できる内容をもっている。外国語としての英語の指導を考えると、伝達機能は、文構造による説明では見落としがちなるところを見せてくれる。つまり、形だけの説明ではない、情報を伝え合う人間の存在を意識させることができる。上で見たように、「英語ではこうなる」とか「直観的におかしいから」というその場限りの言い訳ではなく、英語に特有な伝達機能を整理しておいて指導にあたるということが必要で

ある。以下で論じる諸点をそのためのてがかりとしたい。<sup>10</sup>

## 2. 移動と視点

意味内容が日英語で同じように見えながら実は違う場合をまず考えてみよう。ことばが実際の発話で使われるときには場面がある。その際、話し手と聞き手の場所が問題になる場合がある。よく知られているように、移動を表す動詞 come と go は日本語の「来る」と「行く」に完全には対応しない。たとえば、呼ばれた時にその相手のところに「すぐ行きます」という時、英語では(4a)であって、(4b)にはならない。<sup>11</sup>

(4) a. I'm coming. I'll come in a second.

b. I'm going. I'll go in a second.

簡単に言えば、話し手が移動するとき、英語の話し手は話し手自身の位置だけでなく、聞き手の位置に移動するばあいにも come を使い、それ以外に go を用いる。そのため、come here, come there とは言えるのに、go there は言えても \*go here とは普通言えない。それに対して、日本語の話し手は自分が到着地点にいる場合にだけ「来る」を用い、それ以外は「行く」を使う。そのため、話し手が移動するとき、「ここに来る」「そこに行く」は自然なのに、「そこに来る」「ここに行く」では少し特殊な状況を想定しないと使えない。<sup>12</sup> これは、come と go が、this や that のように、話し手と聞き手の位置がわからなければ使えない言語表現、いわゆるダイクシス（直示体系）の表現であるからである。上で見たように、移動の動詞のダイクシスが英語と日本語で異なるために、(4)で述べた用法のずれ

が起きているわけである。

英語の談話内では、come と go の使いわけは話し手の視点に基づくことになる。つまり、話し手の視点のある場所でどちらの動詞を使うかが決まるということになる。たとえば、話し手と聞き手が家の中から一緒に外に出る時は、I'm going outside. と言うのであって、\*I'm coming outside. とはならないが、話し手が家の外に、聞き手は家の中にいて、中に入る場合は、I'm coming/\*going in となる。しかし、このような使い分けは、日本語になれた感覚には、違いがあるとわかっていても意外に気づかないことがあるようである。たとえば、(5)の例で、電話の相手に向かって「訪ねて行ってもよいか。」ときくのであれば、聞き手のいる場所に行くということになり、聞き手に視点の場所を寄せ go を come にする必要がある。

(5) ? May I go and visit you?

理屈ではよくわかっているつもりでも、案外「行く=go」の発想が(5)のような不適格な表現を誘発しているのではないだろうか。

また、話し手と聞き手の視点の場所は、さらに比喩的な移動の場合にもかかわってくる。たとえば、体温を問題にするとき、普通の状態である平熱に近づく方が come で離れる方が go になる。<sup>13</sup>

(6) a. Duncan's temperature went up today.

b. Duncan's temperature came down today.

(6a)では体温が平熱以上になったということであり、(6b)では平熱に近づいてきたという意味になる。つまり、(6)は単に体温が上下するという表現ではなく、話し手の視点の場

所が平熱のところであり、その場所に近づくのが come, 離れて行くのが go ということである。さらに、話し手は人間にとって好ましい状態に視点を置くと考えれば、次の対比も説明できる。<sup>14</sup>

- (7) a. The motor went/\*came dead.  
b. The motor came/\*went alive again.

つまり、機械が動かない状態は話し手にも聞き手にも離れたものであるために、(7a)では go がふさわしく、逆に(7b)では、動く状態が好ましい状態であるために話し手の視点はそこにあり、come が使われている。このように、come, go には話し手がその視点を情報伝達上どこに置いているかがかわってくる。<sup>15</sup>

また、これまでみてきた視点の場所は、他の動詞にも見られる。<sup>16</sup>

- (8) a. \*The reatment brought John into a coma yesterday.  
b. The treatment brought John out of the coma yesterday.

この場合も、昏睡状態が人間の普通の状態とは言えないので、話し手は視点をそうでない正常な状態に置いて発話しているからと考えてよい。しかも、bring を CAUSE to come と考えれば、come の使役の場合ということになる。<sup>17</sup>

上で述べたように、話し手が移動するとき、英語の話し手は話し手自身の位置だけでなく、聞き手の位置に移動するばあいも come を使い、それ以外に go を用いる。また、その延長線上で、比喩的に使われる場合も、come は「普通の状態」そして「好ましい、期待される状態」に視点を置く表現であり、go はそう

でない状態を視点として表す表現となる。言い換えれば、普通、正常の常態にもどる場合は come, 正常から離れていく場合が go になる。したがって、come は肯定的評価を、go は中立的・否定的評価を表す表現になる。たとえば、論文の進みぐあいを尋ねる時、(9a)と(9b)では話し手のかかわり方が異なり、(a)の方が聞き手には親密に響くのではないだろうか。

- (9) a. How's your dissertation coming along?  
b. How's your dissertation going?

これは、言うまでもなく、実際の発話の場面、談話の中で話し手が自分の視点に基づいて使い分けるとのことである。逆に言えば、使われている動詞から話し手の視点を知らることができるということである。ということは、話し手の心理、態度といったものへの明らかな手がかりとも言うべき表現となる。つまり、単に「ニュアンスが違う」というようなあいまいなものではなく、話し手の視点にかかわる表現は、談話内の話し手の態度が明示的に現れる表現なのである。

このように、談話の中で話し手の視点が反映される表現があるということを理解しておくことは、英語を指導する上で重要なことである。第1節で述べたように、自然な情報伝達という観点から、教材の作成や教材研究、リスニングやライティングの指導、特にコミュニケーションの指導に重要なポイントであると指摘できる。この節では移動の動詞 come と go について話し手の視点を見てきたが、第3節では他の構文に見られる視点とその制約についてみる。

### 3. 視点と談話

第1節と第2節で見たように、能動態の文と対応する受動態の文には(2)の原則が成立しているはずである。

- (2) 論理的意味内容が同じ2つ以上の文構造があるとき、それらは異なる伝達機能上の意味をもつ。

受動態の文は、(10)の(a)の構造を(b)の構造に変えるとできあがると指導される。

- (10) a. 主語 [1] + 他動詞 [2] + 目的語 [3]  
b. 主語 [3] + be 動詞 + 他動詞の過去分詞形 [2] + by + 旧主語 [1]

意味的には(a)の主語は動作主であるのに対して、(b)では経験者が主語になっている。第1.2節で見たように、構造レベルの説明は(10)で十分でも、英語の態を完全にわかったことにはならない。(2)の原則があるからである。伝達機能から見ると、話し手の視点は能動文と受動文で異なっていると考えられる。Kuno (1987: 205)等<sup>18</sup>によれば、受動文はその主語が指している人物に視点を近づけて共感を示す表現である。Kuno (1978)の例にしたがって考えてみると、「JohnとMaryは夫婦で、JohnがMaryをぶった」という前提があるとき、話し手は論理的意味内容が同じ(11)の能動文と(12)の受動文のいずれかを発話することができる。(代名詞 his と her はそれぞれ John と Mary を指す解釈である。)

- (11) a. Then, John hit Mary.  
b. Then, John hit his wife.  
c. Then, Mary's husband hit her.  
(12) a. Then, Mary was hit by John.  
b. ??Then, John's wife was hit by him.  
c. Then, Mary was hit by her hus-

band.

上の状況を言うのに、(11a)はどちらにも肩入れしない第三者的立場の人が用いる中立的な表現と考えられるが、(11b)では Mary を指すのに his wife という表現を使っていることから John 寄りの視点を取っている可能性が高い表現と言える。これに対して、(11c)では John のことを言うのに、Mary's husband を使っていることから Mary 寄りの視点を取っていると考えられる表現になっている。ところが、それぞれに対応する受動文である(12)では、(11b)に対応する受動文(12b)だけがおかしくなり不適格になる。上で述べたように、受動文はその主語が指している人物に視点を近づけて共感を示す表現であるために、John's wife という John 寄りの視点と受動文の主語という Mary 寄りの視点が一致しないせいである。Kuno (1978: 131)では、ここで考えている視点をカメラ・アングルと呼び、次の原則が存在すると主張する。

- (13) 単一の文は、単一のカメラ・アングルしか持ち得ない。

この原則によれば、単一の文には一つの視点しか許されない。この原則により(12b)は不適格とされるわけである。また、能動文である(14)のおかしさも同じ原則で説明される。つまり、(14)では、Mary's husband で Mary に視点を寄せておきながら、his wife で John の方に視点を戻すことになり異なる視点の場所が二つ存在することになるからである。

- (14) \*Then, Mary's husband hit his wife.  
これは、2つの視点が論理的に矛盾するということで、Kuno (1978: 136)では、(13)を次の「視点の一貫性の原則」に修正している。

- (15) 単一の文は、共感度関係に論理的矛盾

を含んではいけない。<sup>19</sup>

(15)は話し手の視点の場所は単一文中で矛盾する場所であってはいけないということであり、本稿でも「視点の一貫性」の原則と呼んでいくことにする。<sup>20</sup>

視点の一貫性は従属節をもつ複文でも成立する。<sup>21</sup>

- (16) a. When Mary criticized John, he slapped her on the face.  
 b. When Mary criticized John, she was slapped by him on the face.  
 c. When John was criticized by Mary, he slapped her on the face.  
 d. \*When John was criticized by Mary, she was slapped by him on the face.

すでに見たように、能動文が共感表現としては中立的な表現であるのに対して、受身文は新主語寄りの視点になる。(16d)だけに従属節にも主節にも受動文があるので、視点の場所は2つあることになる。(16d)だけが不適格なのは、その従属節の視点の場所(John寄り)と主節の視点の場所(Mary寄り)が違っていて矛盾してしまうために視点の一貫性の原則に合わないからである。

このように、英語の所有格表現や受身文は話し手の視点を明示的に表す表現であるため、これらの表現を使う場合には当然話し手の視点つまり共感がかかわってくることになる。論理的に意味が同じでも、異なる伝達機能上の意味をもつと仮定すれば、言い換えや書き換えをすると大きな意味の違いが生じる可能性がある。したがって、英語指導上も、書き換え問題等で、態の転換をする際には、十分

な注意が必要になってくる。書き換えについては、第4節で見ることにしたい。

話し手の視点は英語の相互動詞(reciprocal verb)と呼ばれる動詞を使った表現にも影響を与える場合がある。これも Kuno (1978: 171-2)にしたがって見てみると、たとえば「会う」の意の meet は(17)からわかるように相互動詞で、主語と目的語を入れ換えても論理的意味が同じである。そのため、受動文を作れない動詞である。<sup>22</sup>

- (17) a. John met Mary on the street.  
 b. Mary met John on the street.

つまり、相互動詞では主語にどちらをたてるかは選ぶことができ、話し手の意図によってきまる。この発話者の意図性は実は談話上大きな影響力をもっている。Kuno (1978: 171)では、談話法規則違反のペナルティーとして、「談話法規則に意図的に違反した時には、特殊な(多くの場合、不適格文)が生じるが、非意図的に違反した場合には、そのようなペナルティーがない。」と述べられている。相互動詞の場合は、意図的違反が成立する場合があります。たとえば、(17)に対して、次例では(b)文は不適格になる。

- (18) a. I met John on the street.  
 b. \*John met me on the street.  
 (19) a. John met an 8-foot-tall girl on the street.  
 b. ??An 8-foot-tall girl met John on the street.

(18b)がおかしいのは、話し手が自分の視点をとらず、他人寄りの視点を取っているためである。<sup>23</sup>上で述べたように、話し手はこの構文でどちらの名詞句を主語に立てるかは選ぶことができるのに、わざと自分以外の第三者

を主語に選んでいるからである。

他方、(19b)には、Kuno (1978: 169)の表層構造の視点ハイアラーキー(20)が関係している。

- (20) 一般的に言って、話し手は、主語寄りの視点をとることが一番容易である。  
目的語寄りの視点をとることは、主語寄りの視点を取るのより困難である。  
受身文の旧主語(対応する能動文の主語)寄りの視点を取るのは、最も困難である。

話し手は、(18b)の場合と同じように、主語を意図的に選べるのに、わざわざ視点をより寄せやすい John ではなく、不定名詞句をおいているために、(19b)はおかしくなっている。つまり、(19)では主語に視点を寄せにくいものをわざと選んでいることになり、(20)の表層構造の視点ハイアラーキーの意図的違反になっているわけである。

しかしながら、意図的違反ではない場合は、上でみた語順は許される。たとえば、(21)の動詞 hit は、行為を行う動作主を主語におくという特性をもっているので、相対的に視点を寄せにくいものが主語にきても許されている。

- (21) a. John hit me yesterday.  
b. An 8-foot-tall girl hit John on the head.<sup>24</sup>

このように、談話上意図的違反であるかどうかは表現の適格性に関係するので注意が必要である。

#### 4. 話者指向、主語指向

##### 4. 1. Please

指向性にかかわる副詞的表現として取り上げたいのは please である。ここで問題にした

い用法は、(22)のように、may it please you や if you please から派生したとされる please を副詞的に用いる使い方である。

(22) A: Can I use your pen?

B: Yes, please.

ここで、Bの答はAの頼みに対して非常に奇妙に響く。もしも、日本語話者が「please = どうぞ」<sup>25</sup>という考えをとっていれば、(22)の対訳である(23)からすると、(22)のBの発話のおかしさに気づくことができないであろう。

(23) A: 「あなたのペンを使ってもいいですか。」

B: 「ええ、どうぞ。」

この日本語の対訳は問題のない談話である。ところが、(22)はネイティブスピーカーが一読して気づく非常におかしな対話である。そのおかしさの原因はなんであろうか。たとえば、Tea, please. は「お茶をください」の意味であって、「お茶をどうぞ」の意には決してならないし、下降調で言われる Please ! は「よしてくれ。おねがいだから。やめてくれ。」の意味になって、「どうぞ」の意味で使うことはできない。ということは、少なくともこれらの場合については「please = どうぞ」という考えがあてはまらないということになる。Hofman and Kageyama (1986: 55-6)は、(24)のように、依頼や懇願や願望を言う場合は please を使えるが、(25)のように、指示や推薦や許可の文に please は使えないと言っている。言うまでもなく、(22)のBの発話は許可になるべきはずのものである。<sup>26</sup>

(24) Please wash the dishes.

Will you please wash the dishes?

Please let me go with you, mummy.

Please have a nice trip.



(25) \*Please put the meat on first, so it will be done on time.

\*Why don't you please put the meat on first?

\*Please take 2 pills after each meal.

\*You may please go home now.

依頼・懇願・願望は自分のためにする行為のことであるのに対し、指示・推薦・許可は相手のためになると言うことができる。そのように考えると、please が使えるのは、相手(聞き手)の利益になるような場合ではなく、自分(話し手)の利益になる場合であると解釈できる場合と考えてよい。したがって、Hofman and Kageyama (1986: 57)で結論づけているように、「どうぞ」は相手のためになるという意味で聞き手指向表現であるのに対し、please は話し手自身のためになる話者指向表現であると言うことができる。つまり、「please=どうぞ」という式ではなく、「please=どうか」に近いわけである。

この違いは英語の指導上、かなり重要なポイントである。Hofman and Kageyama (1986: 55)の指摘が正しければ、外国語としての英語を話途中で日本人だけがする間違いのようである。註の25でも述べたように、「please=どうぞ」という誤解はいまだにかなり多いようである。<sup>27</sup>たとえば、「ケーキをもっとどうぞ。」の意味で適切なのは(26a)であって(26b)ではない。

(26) a. Have some more cake.

b. Have some more cake, please.

同じ状況で(26b)のように言えるのは、ケーキを作った調理人自身や接待している主人であろう。というのは、そうした人はケーキを食べてもらうことによって自分達の利益にな

るからである。それ以外の人が(26b)を使うのは当然奇妙に響くことになる。

外国語を使う場合に困るのは、自分でそれと気づかずに余計なことを言ってしまうと相手の気分を害してしまうことである。Hofman and Kageyama (1986: 57)によれば、(27)は、Could you...という丁寧表現<sup>28</sup>が使われているにもかかわらず、相手の部屋で使えば相手を侮辱し怒らせてしまうことがある表現である。

(27) Could you open the door, please?

この表現は、ドアが開くのを望み、それを頼むことのできる権利を持っている上司になら使える表現である。<sup>29</sup>自分のためになることを人に頼める立場にあるからであろう。しかし、対等な立場の人が「どうぞドアを開けてください。」のつもりでpleaseを使い、丁寧表現にしたつもりでもそうならないということに注意すべきである。つまり、ここでpleaseは表現の丁寧さを増すどころか相手のプライドを傷つけてしまいかねないものであることに注意しなければならない。上で述べたように、pleaseが、相手ではなく、話し手自身のためになる話者指向表現であるからである。言い換えれば、pleaseが使える談話では、話し手が自分自身の利益になるようなことを表す状況でなくてはならない。

このようなpleaseにかかわる話者指向性の基本は、一旦わかってしまえば大きな誤用はないであろうが、カタカナ英語として日本語に入っている表現であるだけに、誤って使われやすいのではないだろうか。<sup>30</sup>依頼・指示などのコミュニケーション指導において自己表現にかならずかかわる内容であるだけに、pleaseの使い方は英語の発想のひとつとし

て定着させたいものである。

#### 4. 2. 話者が主語か

次の対比を考えてみよう。

(28) a. She is sure to succeed.

b. She is sure of succeeding.

(28)の対比のポイントは、言うまでもなく、確信している主体の違いである。つまり、(28a)は話し手が彼女が成功すると確信しているのに対して、(28b)は主語である彼女が確信しているという違いである。言い換えれば、(28a)は話し手の視点で確信を述べたもの<sup>31</sup>で、(28b)は話し手が主語の視点から主語の確信を述べたものである。ネイティブスピーカーなら即座に答えられるこの違いは、学生の反応から見てもやはり日本人には気づきにくいものであるということが出来る。英語を学習する方から見ると、不定詞表現にするのか動名詞表現をとるかといった形式的な構文の違いに過ぎないと見落とされがちなポイントと言えるかもしれない。<sup>32</sup>実際は、これまで見てきた例と同じように伝達機能上の意味の違いがある表現である。そうであれば、状況によってはこの伝達機能上の意味の違いが情報伝達場で決定的な役割を果たす可能性ももっているわけである。特にコミュニケーションのための指導において、こうした情報伝達上の意味の違いには留意しておく必要があると思われる。

#### 4. 3. 書き換えと意味の変化

1. 2. 節で文構造と談話機能の関係を考えたときに次の原則を見た。

(2) 論理的内容が同じ2つ以上の文構造があるとき、それらは異なる伝達機

能上の意味をもつ。

註6でも述べたように、初期の生成文法では「変形は意味を変えない」という立場で研究がすすんでいたが、この「意味を変えない」は「知的意味を変えない」ということであった。他方、学校での英語指導の際に、しばしば、構文練習として課される書き換え問題は、「書き換えてももとの文と同じである」という前提ですすめられる。しかし、(2)の原則からすると、この前提が怪しくなってくる。違った形式の文があるとき、伝達機能上の意味の差は、ほんの感情的な差異で、書き換えにおいて無視してよい場合もあれば、論理的内容の差に近いものまでであると考えられる。むしろ、上で例を見てきたように、書き換えた場合、要素の語順が変わり、そのために視点の場所が変わってしまう例が多いと言ってよい。そのため、書き換え問題は注意が必要であり、すくなくともどういった伝達機能上の意味変化が起こるか指導者は認識しておく必要がある。機械的な書き換えは、形式だけの転換で学習者が満足してしまっていて、ことばをコミュニケーションの手段とする肝心の話し手と聞き手が見えてこないという危険性をもっている。

たとえば(3)で見た態の書き換えがそれを裏づける例であった。

(3) a. I hit the boxer.

b. ?The boxer was hit by me.

この態の転換は(30)でも問題になる。<sup>33</sup>

(29) a. John hit Bill on purpose.

b. Bill was hit by John on purpose.

(30) a. John intentionally seduced Mary.

b. Mary was intentionally seduced

by John.

(29)では(a)(b)共に、「わざと」ぶつのは John であるので、書き換え問題にしてもよいが、(30)の方は、「わざと」誘惑するのが John である(30a)に対して、(30b)では Mary が「わざと」誘惑を受けるという意味が成立するからである。

また、ものを買うのと売るのは次のように論理の意味は同じと考えられる。<sup>34</sup>

(31) a. John sold the used car to Bill.

b. Bill bought the used car from John.

しかし、次の対比を書き換え問題とすることはできない。<sup>35</sup>

(31') a. John sold the used car to Bill out of kindness.

b. Bill bought the used car from John out of kindness.

副詞表現の out of kindness はどちらの場合も主語にかかり、(a)では John が「親切心から売る」のであり、(b)では Bill が「親切心から買う」からである。こういう副詞類を主語指向副詞と呼んでいる。これに対して、hopefully, fortunately, honestly のような文副詞は話者指向副詞と呼ばれ、話し手の視点から主文の命題に対する話し手の態度を表す。

(32) Hopefully, it will not rain tomorrow.

また、次のような書き換えも、that 節と不定詞節の共通性を示すためによく行われるものである。

(33) a. I understand Mary to be willing to help.

b. I understand that Mary is willing to help.

この対比は論理の意味が同じで書き換えが可

能であるとされているが、話し手の補文命題に対する態度は違っている。つまり、「Mary が協力的である」という事態は(a)(b)と同じであるが、(a)では話し手が自分の判断か、Mary に直接会った印象からそう思うという意味合いがあるのに対し、(b)ではファイルなどの資料をもとにそう思うというような意味合いがある。したがって、(33a)は話し手の主観的判断を述べたものであり、(33b)は客観的判断を示している。<sup>36</sup>このような補文の形式と意味合いの違いは、一般的のものであり、Bor-kin (1984: 79)によると、(34)では(a)から(c)にいくにしたがって直接性が高くなる。<sup>37</sup>

(34) a. I find that this chair is uncomfortable.

b. I find this chair to be uncomfortable.

c. I find this chair uncomfortable.

この補文の現われ方と意味合いの違いは、談話では当然伝達機能上の意味の差となってくるはずのものである。ある事態を認識し、それを聞き手に伝える場合に、話し手は文型を選択しなければならない。話し手は、その事態をどのようにとらえているかによって、適格な(補)文形式を選び相手に伝えなければならないということである。話し手が事態に対してとる態度をはっきりさせねばならないような談話では、(補)文形式が決定的とも言える意味をもつことは容易に推測できることである。

実はこうした表現にかかわる意味の差は書き換え問題という学習形式では見えてはいけなものである。それだけに書き換えには注意が必要であると言えるであろう。節の始めで述べたように、すくなくとも書き換えによ

ってどういった伝達機能上の意味変化が起こるか指導者は認識しておく必要がある。機械的な書き換えでは、学習者は形式だけの転換で満足してしまっていて、ことばをコミュニケーションの手段として使うことを忘れてしまう。ことばを適切に使うことを学ぶ英語教育では、談話の中の話し手（書き手）が見えるような指導が望まれる。その点でも、英語表現の持つ伝達機能の重要性を強調しておきたい。

### 5. 主語を特徴づける

第1節と第3節で受動文は構造的には[主語+他動詞+目的語]の構造から[新主語(能動文の目的語)+be動詞+他動詞の過去分詞形+by+旧主語(能動文の主語)]へ転換することを見たが、英語には他動詞ばかりでなく(35b)のような自動詞+前置詞の連鎖の受動文が存在する。一般の受動文に対して、疑似受動文と呼ばれる。

- (35) a. Napoleon slept in this bed.  
b. This bed was slept in by Napoleon.

疑似受動文はいろいろな角度から研究されてきた構文であるが、形式だけを見る方法では説明できないことがわかってきている。というのは、以下の例では自動詞+前置詞の連鎖が同じであるのに、疑似受動文ができる場合とできない場合があるからである。

- (36) a. \*I was waited for by Mary.  
b. I don't like to be waited for.  
(37) a. \*The U.S. has been lived in by John.  
b. The U.S. has been lived in by generations of immigrants.  
(38) a. \*The room was walked through

by the boy.

- b. This room was walked through by the boy before he killed his mother.

(a)の疑似受動文は不適格であるが、(b)は適格である。高見(1993)によれば、(a)文では主語が述部によって特徴づけられていないが、(b)文では主語が特徴づけられているという違いがある。私は人に待たれるのが嫌だとか、アメリカは何世代もの移民が住んできたとか、この部屋は母親を殺す前に少年が通ったとかいった記述は、それぞれの主語を特徴づけるのに十分であるが、(a)文では特徴づけに足るような記述になっていない。伝達機能の点から見れば、これらの疑似受動文を用いるためには主語を特徴づけるという理由がなければならないということである。一般の受動文の場合と同じように、疑似受動文を使うには、対応する能動文を使わない(場合によっては使えない)理由がなければならないということになる。<sup>38</sup>

### 6. 結語

以上、英語教育でこれまであまり触れられてこなかった英語表現の伝達機能を論じてきた。形式が異なればそれに対応して意味も異なると考えるのが自然である。(2)の原則はまさにそれを述べたものにすぎない。機能文法の立場で英語の構造をその伝達機能から見ることは、英語指導で陥りがちな形式一辺倒の学習をことばを使う場面に戻して考えさせてくれる。上で見た視点や指向性や特徴づけにかかわる英語の表現は、それらが談話でどのような伝達機能をもつかを示すものであった。それらの伝達機能は談話理解に必要な話し手

の態度や視点を提供するものである。その意味で、英語表現の伝達機能を知っておくことは、言語の適切な使用を指導する言語教育で重要な内容をもっている。この側面はまさに英語の指導全般にかかわるが、特にコミュニケーション指導を支えるものである。

その延長線上で情報伝達のための会話のストラテジーの学習へと進むことができる。さらに言語に特有の発想の違いまで学習が進めば、異文化理解につながると考えられる。そのような可能性については稿を改めることにしたい。

#### 註

\* ネイティブスピーカーとして、例文に関してコメントをいただいた Zonia LuAnn Mitchell 女史、また調査のための質問票に答えてくれた学生諸君に感謝の意を表したい。なお、本稿は文部省科学研究費補助金の交付を受けた奨励研究 A「英語の談話機能的側面の研究」課題番号 05710292 による研究成果の一部である。

1. Kuno(1987), Halliday(1985)等を参照。
2. たとえば、談話内のつながりの重要性を主張する Mei-yun(1993)の論文、また機能英文法を提案する村田(1982)を参照。
3. 一般に同じ意味でテキスト(text)と呼ばれるものも談話と同じと考えてよい。
4. Robert B. Parker (1990) *Stardust*. New York: Berkley.
5. 「情報の重要度は軽から重へ」という考え方もある。久野(1983), 高見(1991)参照。
6. 初期の生成文法では「変形は意味を変えない」という立場で研究がすすんでいて、その代表になっていたのが、受動化(Passivization)であった。したがって、その「意味を変えない」は「知的意味を変えない」ということであった。
7. 以下?と??はその表現がおかしいということとを、\*は不適格であることを示す。
8. Kuno(1987: 205)では、次のように述べられている。

- (i) And when a passive sentence pattern is used, the speaker is closer to the referent of the new subject than that of the old one.

これは、Kuno (1978: 130)で「受身文のカメラ・アングル」とされていたものである。

- (ii) 受身文のカメラ・アングルは、新しい主語の指示対象寄りである。

9. 自然な情報伝達の延長線上で、会話をうまくすすめるための会話ストラテジーを考える必要がある。たとえば、次の会話はちぐはぐである。

(i) A: I really like your scarf.

B: Ohh nooo it's nothing.

A: No, I really like it.

B: It's not new.

A: I still like it anyway.

B: ((smiles))

A: Uhh, well, are you uh going to class?

これは Hatch (1992: 138)の例であるが、アメリカ英語ではお世辞が天候の話題のように会話を始めるきっかけになると言う。話し手 A はネイティブスピーカーで、B は日本語が第一言語である。ここでは、B が A のお世辞を認めないために会話が次の話題に発展していない。

10. 議論の参考にするために、筆者の授業を受講している教育学部の学生20名に質問票に答えてもらうという形で本稿と関係する英文について調査をしている。参考のためではあるが、結果を以下関係するところでコメントしておきたい。機会があれば、より多くの学生を対象により詳細な調査を行なうつもりである。
11. ただし、日本語でも同じ状況で「今来る(けん).」と「来る」を使う地方(筆者の知る限りでは、長崎市)もあるようである。
12. 特別な状況を想定すれば使えないことはない。たとえば、地図を見ながら言うような場合である。英語の\*go hereにも同じことが言える。なお、英語の come, go については Clark(1974), 日本語の「来る」と「行く」については大江(1975), 久野(1978)を参照。
13. (6)は Clark (1974: 318)から。

14. (7)は Clark (1974 : 320)から、類例として次の対比もある。

- (i) a. \*He went round very slowly.
- b. He came round very slowly.
- (ii) a. \*Matilda came livid with rage.
- b. Matilda went livid with rage.

(i)はふくよかになった、(ii)は激怒で青ざめたということで、(b)文が適格であることは話し手のその事態に対する態度が読み取れる。

15. 第三者の移動についても、話し手の視点の場所がわかる。たとえば、

- (i) a. The door opened and three men came in.
- b. The door opened and three men went in.

言うまでもなく、(ia)では話し手は扉のある建物の中にいるのに対し、(ib)では建物の外にいるということがわかる。

16. (8)は Clark (1974 : 322)から、

17. go の使役形は take と send の二つが考えられる。Clark (1974 : 321-2)から例を引く。

- (i) a. \*The treatment took John into a coma yesterday.
- b. The treatment took John out of the coma yesterday.
- c. The treatment sent John into a coma yesterday.

18. 註8を参照。

19. Kuno (1987 : 207) では次のように規定されている。

- (i) Ban on Conflicting Empathy Foci : A single sentence cannot contain logical conflicts in empathy relationships.

20. 註の10で述べた調査では、この視点の一貫性に気づくことは難しいようで、(14)のおかしさに気づいた学生は半数、(12b)のおかしさに気づいた学生は全体の2割であった。

21. (16)は Kuno (1978 : 158)から、

22. (17a)を機械的に受動文にすると不適格である。

- (i) ??Mary was met by John on the street.

23. Kuno (1978 : 146)では「発話当事者の視点ハイアラキー」として、次のように規定されている。

- (i) 話し手は、常に自分の視点をとらなければ

ならず、自分より他人寄りの視点をとることができない。

24. Kuno (1978 : 173-4)参照。

25. この用法の please はよく出てくる表現でありながら、「please=どうぞ」がいつも当てはまるという誤解は実際にまだにかなり多いという反応を、中学校の先生方からも得ている。

26. (22)のばあい、Yes, of course.あたりが自然な対話であろう。Yes, you may.ならある状況が想定される堅い表現である。

27. 質問票に答えてもらった学生のうち(22)についてきちんとした説明になっていた者は半数もいなかった。問題は数人が(22)の B の発話をおかしいとさえ気づいていないと思われることである。

(22) A : Can I use your pen?

B : Yes, please.

そうした学生は相手に利益になると思われる場合にも誤って please を付けてしまう可能性が高いと言える。

28. 一般に丁寧表現は、依頼など相手に判断の余地を与え、間接的になればなるほど丁寧になるとされている。

29. Hofman and Kageyama も述べているように、ある特別な状況を考えれば、対等な人でも(27)が使える。たとえば、相手のために何かしてあげているが、両手がふさがっていて自分ではドアを開けられないといった場合、一時的に相手に命令できる立場なら(27)を言うことができるであろう。

30. 註25参照。

31. (28a)は It is certain that she will succeed. で書き換えられることも確信の主体が話し手であることを示している。

32. 質問票では違いを説明しなさいという指示で答えてもらった対比であるが、満足な説明になっているものは3分の1程度であった。しかも受験英語の弊害か、I remember to post/posting your letter.の対比と同じ意味の差があるものと誤って答えている学生が意外に多かった。

33. Hofman and Kageyama (1986 : 54)参照。

34. 同じことを2通りに表現していることになるが、実際は、話し手は両者を区別して使い分けている。つまり、話し手は、(31a)では

John 寄りの視点をとっており, (31b)では Bill 寄りの視点をとっている。

35. Hofman and Kageyama (1986: 53)参照。

36. 残念ながら, (33ab)の違いを説明せよという質問に対し, 質問票による調査では学生の説明に満足のいくものはひとつもなかった。

37. 詳しくは田中(1993)を参照。また次のような発話はより直接的な断定表現と言える。

(i) This chair is uncomfortable.

38. 高見(1993)によれば, (ia)のような中間構文や, (iia)のような tough 構文にも主語を特徴づけるという機能がある。

(i) a. This book reads easily.

b. People can read this book easily.

(ii) a. John is tough to please.

b. It is tough to please John.

#### 参考文献

- Borkin, Ann. 1984. *Problems in Form and Function*. Norwood: Ablex.
- Clark, Eve V. 1974. "Normal states and evaluative viewpoints." *Language* 50, 316-32.
- 福地肇. 1983. 「語順にみられる談話の原則」『言語』12月号, 48-57.
- 福地肇. 1985. 『談話の構造』東京: 大修館.
- 福地肇. 1988. 「機能文法の力とそのねらい」『言語』10月号, 36-44.
- Halliday, M.A.K. 1985. *An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold.
- Hatch, Evelyn. 1992. *Discourse and Language Education*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hofmann, Th. R. and Taro Kageyama. 1986. 『10日間意味旅行』東京: くろしお出版.
- 井上和子. 1983. 「文-文法から談話文法へ」『言語』12月号, 38-46.
- 伊藤健三他著. 1982. 『英語学大系12英語学と英語教育』東京: 大修館.
- 久野暉. 1978. 『談話の文法』東京: 大修館.
- 久野暉. 1983. 『新日本文法研究』東京: 大修館.
- Kuno, Susumu. 1987. *Functional Syntax*. Chicago: Chicago University Press.
- Mei-yun, Yue. 1993. "Cohesion and the teaching of EFL reading." *English Teaching Forum* 31, No.1, 12-15.
- 毛利可信. 1980. 『英語の語用論』東京: 大修館.
- 村田勇三郎. 1982. 『機能英文法』東京: 大修館.
- 新里眞男. 1993. 「コミュニケーションのための英語教育」『英語展望』99, 2-7.
- 大江三郎. 1975. 『日英語の比較研究—主観性をめぐって』東京: 南雲堂.
- 関茂樹. 1992. 「機能文法の魅力」安井泉編『グラマー・テキスト・レトリック』東京: くろしお出版.
- 高見健一. 1991. 「情報の重要度と言語現象」『言語』10月号, 38-45.
- 高見健一. 1993. 「語用論と統語論のインターフェイス—機能的構文論の立場から—」『英語青年』139, 219-21.
- 田中彰一. 1993. 「言語理論と英語教育(1)—英語の文を理解する—」『佐賀大学教育学部研究論文集』40, No.3, 25-37.
- 田辺洋二. 1990. 『学校英語』東京: 筑摩書房.
- 土屋澄男. 1990. 『英語科教育法入門』東京: 研究社出版.
- 安井稔. 1978. 『新しい聞き手の文法』東京: 大修館.
- 安井稔. 1989. 『英文法を洗う』東京: 研究社出版.

(1993年8月2日受付)